日中学術交流に参加して

2018年、奈文研と中国社会科学院考古研究所は友好共同研究議定書を交わしました。これは1991年以来の共同研究を発展したもので、議定書に基づき2019年２月25日から３月27日まで中国に滞在しました。

中国では北京の考古研究所を主滞在地とし、鄴城工作站や洛陽工作站に出向きました。鄴城では2012年から継続調査中の鄴南城発掘現場を訪れ、昨年着手した内裏中枢部で検出された壮麗な玉石敷道路遺構に目を奪われました。洛陽では奈文研も発掘に関わった漢魏洛陽城の出土瓦整理に参加しました。宮城から出土した鴟尾破片の接合作業をおこない、可能な限り復元して撮影しました。また甘粛省へ足を伸ばし文物考古研究所や博物館、敦煌研究院の展示研究施設を実見し、さらに楡林窟や麦積山石窟等この地域を特色づける石窟遺跡にも訪れました。

北京では研究所主催の2019年度考古学研究系列学術講座の第３回を受け持ち、「日本考古撮影：歴史与技術」と題する発表をおこないました。会場には所員以外に首都博物館員や北京大学等の学生も訪れており、具体的な機材や撮影法に関する質問を受けました。撮影のデジタル化は、若手を中心に実践的技術への習得意欲をもたらしているようです。今回訪れた各地の博物館でも、撮影画像から得たデータを3DやVR・ARに用いて展示に還元している例をたくさん目にし、子供達が目を輝かせていました。いっぽうで根本的な撮影技術について改善すべき部分も垣間見え、この間を埋める技術提携で奈文研が果たすべき役割は重要だと感じました。

諸先輩が重ねた友好関係は本交流を通じて強固になると思います。相互の友好と研究の進展に、今後も寄与できれば幸いです。（企画調整部　栗山 雅夫）

巨大磨崖仏と絶壁の桟道－甘粛省天水市麦積山石窟

日韓発掘交流に参加して

2018年９月３日から10月５日まで、日韓発掘交流事業により、国立慶州文化財研究所に滞在し、月城垓子地区および皇龍寺南門周辺の発掘調査に参加しました。日韓発掘事業は2005年より始まり、昨年で14年目となります。

月城垓子地区は、1984年以降継続的に調査が行われており、近年は復元整備を見据えた調査が進められています。私が参加した段階では調査はほぼ終盤になっており、土層観察用に残していた畦の掘削が進められていました。皇龍寺南門周辺の調査は、1976年から1979年にかけて調査され既に整備された部分を再調査するものでした。整備で高さの位置を変えられた礎石の下には当初の根石が良好な状況で残っていました。断割調査を担当し、大ぶりの石で周囲を固め、比較的小さめの石を中央に配置している根石の状況が確認できました。南門と中門との間には両脇に廊状の建物跡が検出されており、非常に興味をもちましたが、滞在期間中には調査は完了せず、今後の調査成果に期待するばかりでした。私の片言の韓国語にもかかわらず、研究員の先生、作業員の方々には、さまざまに考えを汲んでいただき調査を進めることできました。

調査の合間や雨天の際には、歴史的建造物の修理工事や公開活用事例、最新の遺跡整備事例など韓国における先端の文化財保存活用事例を学ぶことができました。韓国においても発掘成果から建造物を復元するような研究が、今後より一層進められていくようですので、今回の交流をきっかけに復元研究においても、さらに研究交流を活発にしていければと思います。　（都城発掘調査部　前川 歩）

発掘調査風景（左が筆者）